

研究ノート

医学部2年次学生が対話型英語ジャーナル・ライティングを通じて医療におけるプロフェッショナリズムに関する気づきを得る過程

高橋 良子

日本大学医学部医学教育企画・推進室

学習者と教師との間でやりとりされる対話型ジャーナル・ライティング (Dialogue Journal Writing; DJW) は、さまざまな種類の、さまざまなレベルにおける学びを促進すると考えられている。筆者は、2014年10月から10ヶ月間に渡り、医学部2年次の医学英語の授業において、最終成績には影響を与えない課外活動として英語による対話型ジャーナル・ライティングを導入した。本稿では、特に積極的にジャーナル・ライティングを行った学生1名の全ジャーナルの内容を医療におけるプロフェッショナリズム教育の観点から考察を行った。また、当該学生にインタビューを行い、筆者による彼のジャーナルに関する解釈が正確かを確認し、必要に応じて追加の情報を取得した。本稿は、当該学生が対話型ジャーナル・ライティングを行うことにより、医療におけるプロフェッショナリズムに関する気づきを得る過程を詳細に記述し、明らかにすることを目的とする。

キーワード：医療におけるプロフェッショナリズム、プロフェッショナリズム教育、医学英語教育、対話型ジャーナル・ライティング

背 景

対話型ジャーナル・ライティング (Dialogue Journal Writing; 以下、DJW と記す) は、Peyton (1990) によると「学生の言語能力、授業内容に対する理解、ライティングによるコミュニケーション能力の向上を目的に、教員と学生との間で交わされるライティングによるやりとりの一種」と定義され、さまざまな種類の、さまざまなレベルにおける学びを促進すると考えられている。筆者は、2014年10月から10ヶ月間、医学部2年次の医学英語の授業において、最終成績には影響を与えない課外活動として英語によるDJWを導入した。課外活動に参加するか否かは学生の自由意志に任せたと、2年次学生140名中12名が参加した。筆者がDJWの導入を決めた当初の目的は、学生が英語を書く機会を増やすことと、学生との信頼関係を構築することであった。学生がDJWに書いた内容を読み、それに対する返事を書くなかで、筆者は、DJWが当初の目的の達成に十分に資する教育活動であるという実感をもつに至った。そこで、将来的にDJWを正規の授業内活動として定着させる方法を模索するために、学生が書いたDJWの内容を分析したところ、DJWには筆者が当初想定していた以外の効果、具体的にはプロフェッショナリズム教育の端緒となり得る可能性、があるとの気づきがあった。そこで、本稿では、特に積極的にDJWに参加した学生1名の全DJWの内容をプロフェッショナリズム教育の観点から検討し、再分析を行った。また、当該学生にインタビューを行い、筆者による彼のDJWに関する分析や解釈が正確かを確認し、必要に応じて追加の情報

を取得した。

医療におけるプロフェッショナリズムの定義については諸説あるが、例えば Stern (2006) は、臨床能力(医学的知識・スキル)、コミュニケーションスキル、倫理的理解および法的理解という「3段階の基礎」の上に立つ、「神殿の4本柱」(卓越性、ヒューマニズム、説明責任、利他主義)としてプロフェッショナリズムを説明している。医学教育におけるプロフェッショナリズム教育の重要性についてはまずアメリカでこれが注目され、Shrank et al. (2004) によると、American Board of Internal Medicine が1990年に The Elements of Professionalism を提唱し、これが、医学教育におけるプロフェッショナリズム教育の方向付けとなった。その後、日本の医学教育においてもプロフェッショナリズム教育の必要性が広く認知され、朝比奈ら (2012)、朝比奈 (2013)、大西ら (2008)、後藤ら (2009a)、後藤ら (2009b) 等に見られるように、全国の医学部で工夫を凝らしたプロフェッショナリズム教育が試みられてはいるものの、後藤ら (2009a) は未だ日本の医学教育会ではプロフェッショナリズム教育の明確な目標が共有されていないことを指摘している。また、大西ら (2008) は、たとえプロフェッショナリズム教育の目標を立て、教育方法を明確化し、評価方法を計画した場合でも、プロフェッショナリズム教育においては教育者側が意図したカリキュラムと学習者が学び取る内容にはズレが生じやすいとして、プロフェッショナリズム教育の難しさを指摘している。

前述したように、本稿で取り扱う DJW は本来、プロフェッショナリズム教育を意図した教育活動ではなかった。しかし、そのような意図がなかったにもかかわらず、またはなかったからこそ、DJW は参加した学生が自発的に医療におけるプロフェッショナリズムについて気づきを持つきっかけとなった可能性がある。本稿は、その過程を詳細に記述し、明らかにすることを目的とする。

研究の目的

医学部において、ある2年次学生が、医学英語の授業の課外活動として導入された英語 DJW に参加することにより、医療におけるプロフェッショナリズムについて気づきを得る過程を詳細に記述し、明らかにすることである。

対 象

2014年度に医学部の2年次学生であった男子学生 A である。DJW を書き始めた当時、学生 A は20歳であった。医学英語の授業の課外活動として導入された DJW に自主的に参加した12名の学生の中で学生 A に焦点を合わせた理由は、学生 A がもっとも積極的に DJW に取り組んだからである。DJW 研究においては、DJW に1日に書き込んだ記述を「エントリー」と呼ぶが、学生 A は10ヶ月間で60のエントリーを書いた。60のエントリー、語数にして合計11057語を自ら DJW に書き込んだ過程で、学生 A は、教員であり DJW のパートナーでもあった筆者に強制されたからではなく、自発的に選んだトピック(医療におけるプロフェッショナリズム)について、自由に自己の考えや意見を記述したものと評価した。

方 法

・データ収集

収集したデータは、①学生 A による DJW のエントリーと、②学生 A に対するインタビューの 2 種類である。

まず、データ①である学生 A による DJW のエントリーは Google ドキュメントを利用して収集した。Google ドキュメントは、コンピューター、携帯電話、タブレット等を使用し、オンラインでドキュメントを作成、編集できる Google の無料サービスである。DJW を課外活動として導入するにあたり、筆者は、筆者が担当する医学英語の授業を履修していた 2 年次学生の一人一人のために Google ドキュメントを作成した。作成された Google ドキュメントは、それぞれの学生と筆者とのみによって共有された。Google ドキュメント上でなされた編集はドキュメントの共有者と瞬時に共有されるため、Google ドキュメントを使用することにより、学生と筆者はメール等を利用することなく、容易に DJW を共有することが可能となった。

なお、課外活動としての DJW の導入に際し、筆者が学生に説明した DJW のルールは以下のとおりである。(1) DJW は医学英語の授業の課外活動であり、参加は自由である。参加してもしなくても、医学英語の授業の最終成績に影響は一切ない。(2) DJW は英語で書かなければならない(ただし、英語でどう表現してよいかわからない言葉は日本語のまま残しておいてもよい)。(3) DJW はいつ、何を書いてもよい。(4) DJW を書く際は、文法や語彙よりも内容に焦点を合わせる。(5) 教員は可能なかぎり速やかに共有されたエントリーに返事を書く。(6) DJW の内容は、許可なく教員以外と共有されることはない。これらのルールを定めるにあたっては、Peyton (1990) や Yoshihara (2008) を参考にした。

学生 A は 2014 年 10 月から 10 ヶ月間で 60 のエントリーを Google ドキュメント上で筆者と共有した。このすべてのエントリーがデータ①である。

データ②となった学生 A に対するインタビューは、2015 年 8 月に医学部の筆者のオフィスで行われた。インタビュー中、学生 A と筆者は日本語で会話した。インタビューの内容は主に、筆者によるデータ①の解釈が学生 A から見ても妥当なものであるか否かの確認である。また、必用に応じてデータ①の内容について補足の説明を依頼した。インタビューは学生 A の許可を得て録音され、筆者によって書き起こされた。

・筆者の立場

筆者は、2014 年 4 月現在、医学部で医学英語を担当する英語教員である。筆者には医学を学んだ背景はない。

・分析方法

データ①である学生 A による DJW のエントリーの内容を詳細に読み込み、Stern (2006) を参考に、医療におけるプロフェッショナリズムに関係していると評価できる意味のまとまりを抽出したうえで、「臨床能力 (医学的知識・スキル)」、「コミュニケーション・スキル」、「倫理的理解および法的理解」、「卓越性」、「ヒューマニズム」、「説明責任」、「利他主義」7 種類のラベル付けを行い、分類した。エントリー内容を理解し、解釈するにあたっては、データ②である学生 A に対するインタビューの内容も参考にした。

結 果

学生 A は、英語 DJW を書く過程で、医療におけるプロフェッショナルリズムのさまざまな側面についての気づきを得た。以下、Stern (2006) による医療におけるプロフェッショナルリズムの定義に従って、学生 A によるプロフェッショナルリズムについての気づきと評価することができるエントリーを紹介する。なお、以下で紹介する学生 A のエントリーは筆者が日本語に訳し、内容を理解しやすいよう必要に応じて一部表現を追加したものである。筆者による日本語訳と追加部分は、学生 A によるチェックを経た。学生 A が DJW に書き込んだ英語によるオリジナルのエントリーは、筆者が手を加えることなく書かれたとおりに「資料」に掲載した。

・臨床能力 (医学的知識・スキル)

学生 A は未だ学生であるため現時点で高い臨床能力を持っているわけではない。しかし、学生 A のエントリーには、将来医師として高い臨床能力を得たいという強いこだわりが見て取れた。エントリー 1 は、学生 A が 3 年次に進級し、生きた人間である同級生に実際に針を刺して行う採血実習を初めて経験した直後に書かれたエントリーである。学生 A の臨床能力 (スキル) に対する思い入れが読み取れる。

エントリー 1 : 採血実習では、恥ずかしい思いをしたし、後悔が残った。友達は皆 1 回で採血に成功したのに、僕は 3 回も友達に針を刺してしまったにもかかわらず失敗してしまった。皆が簡単にできることを、なぜ僕はできないのかと思い、自信がなくなってしまった。もちろんこの経験のせいでネガティブな気持ちになってはならないと思うが、この経験をすぐに忘れることはできないだろう。しかし、この経験に立ち向かい、失敗から学んでよい医師にならなければならない。(2015 年 3 月 31 日)

エントリー 2 は、高い臨床能力 (医学的知識) に関するものである。

エントリー 2 : 昨日、いいニュースがあった。循環器と呼吸器の試験でいい点数が取れた。どちらの試験も、特に循環器の試験は難しくて落としてしまったかと思っていたので、少し嬉しかった。実は、去年、免疫の試験を落としてしまったので、自信がなかった。試験を落としたとき、後悔して、二度と試験を落とさないと決めた。自分がすごいと先生に威張りたいわけではなくて、失敗が自分を強くしてくれたと言いたい。(2015 年 1 月 17 日)

エントリー 2 では医学的知識を習得することが、試験において高得点を得ることと同一視されているきらいはあるが、学生 A の医学生として、また将来の医師としてのプロフェッショナルリズムが表出している。

・コミュニケーション・スキル

学生 A は、使用言語にかかわらず自己のコミュニケーション・スキルを非常に低く評価していた。それに加え、将来医師になったときにはコミュニケーション・スキルが重要であるという認識を明確に持っており、コミュニケーション・スキルについて書かれたエントリーが数多く存在した。エントリー 3 は、医学生としての勉強が多忙であるにもかかわらずクラブに所属し、クラブ活動に長時間を割いているように見える学生 A に筆者がその理由を尋ねたエントリーに対する応答である。

エントリー 3 : しかし、少なくとも日本においてクラブ活動は重要であると思う。(中略) クラブ活動は年上のさまざまな人たちと関係を持つ機会である。クラブ活動以外の場所でそのような機会を得ることは難しい。年上の人たちとコミュニケーションする練習をしておくと、医師になったときに役立つと思う。(2014 年 10 月 28 日)

学生 A は、2 年次終了時に、英語を話す模擬患者が参加した英語医療面接実技試験を受けた。医療面接とはいわゆる問診のことであり、この試験において、学生たちは初めて会う英語が堪能な模擬患者（多くは外国人）に対し、英語で問診を行わなければならなかった。学生 A はその試験でうまくできなかったと思い、試験直後にエントリー 4 を書いた。

エントリー 4：私はコミュニケーションがうまくできないが、失敗することによってのみ自分のコミュニケーション能力を向上させることができると思う。「僕はなんて駄目なんだろう！」ばかり書いてごめんなさい。でも、失敗を分析して書くことによって覚えていることが必要だと思う。今日のことを忘れない。(2015 年 1 月 17 日)

・倫理的な理解および法的な理解

学生 A は倫理的な理解および法的な理解に関するエントリーも複数書いている。エントリー 5 は、筆者が法学部出身であると DJW に書いたことに対する返答である。

エントリー 5：法律は医学と深く関係していると思う。なぜなら、医師は法律に基づいて治療したり薬を処方したりしなければならないからだ。しかし、法律が重要だとか重要でないとかを簡単に決めつけることは難しいと思う。法律が厳しすぎると、それは医師を縛ることになり、医師は患者の幸せを第一に考えることができなくなる。しかし、法の縛りが緩すぎるのも危険である。悪徳な医師が患者のためでなく金儲けのために治療計画を立てる可能性があるからである。法律と医学の関係がどのようなものであるべきかは難しい問題だが、医学生は法律をしっかりと学ばなければならないと思う。(2015 年 3 月 17 日)

エントリー 5 では、法律を学び、理解することの重要性について述べられているだけでなく、「医師は患者の幸せを第一に考えるべきである」、「金儲けのために治療する医師は悪徳医師である」といった医師としての倫理観やヒューマニズムにもつながる叙述が見られる。

・ヒューマニズム

エントリー 6 は、動物実験に関するものであり、学生 A のヒューマニズムの芽生えが見て取れる。

エントリー 6：ところで、金曜日には実験をした。生理学に関する実験で、1 フィートもある大きなカエルを使った。ショックなことに、実験中、僕たちのグループはカエルを 6 匹も殺してしまった。こんなことは二度としたくない。しかし、医師になるということがどれほど厳しいことかを学ぶいい経験になった。(2015 年 4 月 11 日)

エントリー 6 についてインタビューで尋ねた筆者に対し、学生 A は、「あれ（カッコの中は筆者注：動物実験）はきつくて。本当にきつくて。（一緒に実験を行った）グループには何人かいたんですけど、なぜか僕がカエルを殺す役みたいになっちゃって。（実験が）終わったあと、何か言わなきゃいけない、考えなきゃいけない気持ちになって、でも誰にも言えなくて。DJW があったから（実験について書いて）よかった。でも、すごい時間かけたのに全然うまく書けなくて。「いい経験になった」とか、そんなんじゃないことはわかってるんです。でも、これ（エントリー 6）以上はどうしても書けなかった」と答えている。

学生 A は DJW に書き込むことによって多くの動物を殺さなければならなかった罪悪感を緩和することができた。しかし、実際に書いてみると、エントリー 6 の内容が自分の経験に比較して浅薄だと感じられ、そこから医師になることの意味をより深く考え始めたことと評価することができるであろう。

・利他主義

エントリー 7 は、学生 A の利他主義に対する意識を表している。

エントリー7：患者さんを幸せにできる自信がない。(2015年3月17日)

「患者を幸せにする自信がない」ということは、逆に言えば学生Aの中にはすでに「医師は患者を幸せにしなければいけない」という利他主義の芽生えが宿っていると言える。学生Aの利他主義的考え方はほかにも、エントリー5の「医師は患者の幸せを第一に考えるべきである」、「金儲けのために治療する医師は悪徳医師である」といった内容にも反映されている。

考 察

ここでは、医療におけるプロフェッショナリズム教育およびDJWに関連する先行研究に依りながら、学生AがDJWを通して医療におけるプロフェッショナリズムについての気づきを得ることが可能であった理由について考察する。

・ナラティブの効果

DJWに書かれる文章は、Morroy (1985)によると、ナラティブ、つまり物語性をもつ。教員がトピックを限定するのではなく、学生が自由にトピックを選択してよいとされていることに加え、レポートのように提出の締切が設定されているわけでもない。その結果、学生は自分が語りたい物語を語りやすいように語ることができる。そして多くの場合、学生が語りたい物語とは、彼らにとって身近でありつつも何らかの意味で重要であると彼らが感じていることである。たとえば、学生Aもクラブ活動や授業の内容、友人とのやりとりなど日々経験していることについて物語ることがほとんどであった。そして、その物語に自らが付与した意味をも同時に語るため、概念としての抽象的なプロフェッショナリズムではなく、具体的な経験からプロフェッショナリズムへと昇華する可能性のある気づきを導き出したと捉えることができるであろう。また、DJWの読み手である教員もDJWのもつ物語性について意識的であるため、学生が書く内容に対し、「正しい/正しくない」という判断を留保する傾向が強い。たとえ教員が個人的には学生の語りがプロフェッショナリズムの観点から好ましくないと感じたとしても、即座に否定するのではなく、教員自身の物語を「語り返す」ことによって対話が続いていく。「正しい/正しくない」という判断を留保された状態で物語を交わせることは、学生が自らのプロフェッショナリズムに意識を集中させ、考察を深めてゆける一因となる。

・読み手に対する信頼

Station & Peyton (1986)は、看護学生が臨床実習に際して記録したDJWに関する研究で、DJWが教育活動として成功するためにもっとも重要なことは、学生と学生が信頼できる読み手との上辺だけでないやりとりがDJWの中に存在すること、を挙げている。学生が自ら選択した話題について、自分が感じたことや考えたことを正直に書くことは、学生にとっては潜在的に恐怖を感じる行為である。もし学生が読み手を信頼できず、読み手が自分を評価、批判、攻撃する材料を与えるためにDJWを書かされていると感じてしまったら、プロフェッショナリズムについて考察する以前の段階で委縮してしまうであろう。

この点につき、学生Aはインタビューの中で「最初は、先生(筆者)がどんな人かわからなかったから、怖かったんです。新しい先生だったし、授業では英語しか話さなかったから、距離を感じていて。だから最初はDJWも間違いがないように緊張して書いてたけど、だんだん気にしなくていいんだと思うようになって、今は何でも書いちゃえと思っています」と話している。

確かに、学生AはDJWを始めた当初、常にエントリーを「私の書いたものを読んでくださってありがとうございます」、「お忙しい中、お返事をくださってありがとうございます」等といった他人行儀な挨拶で書

き始めていた。しかし、10ヵ月後のエントリーでは、その月が誕生日であると述べた筆者に対し、「誕生日おめでとう！！で、何歳になったの？」と返すようになっている。エントリーのやりとりを交わす中で、学生Aが筆者に対し親近感を覚え、信頼を感じるようになったことが、彼がプロフェッショナリズムについて省察を重ねることができた原因のひとつと捉えることができる。

・教員によるフィードバック

学生のDJWに対しては通常、その学生を普段の授業で担当している教員がフィードバックを行う、つまり「返事を書く」ことが多い。Shuy (1987) は、教員はDJWのフィードバックにおいて学生に対し、自分がすでに答えを知っていると考えている質問を投げかけ、学生に自分と同じ答えを書かせようとする傾向が高いことを指摘している。Arnold et al. (1973) によると、そのようなフィードバックを受けた学生は、教員をDJWの読み手というよりは評価者とみなし、教員が期待する答えを短い文章で書くことが多い。それに対し、Smyth (1989) は、教員自らが答えを知らないような質問を返すと、学生は長く、複雑で、内容の深いエントリーを書くことと指摘する。この点につき、筆者は医療関係者ではなく、医学についても医療におけるプロフェッショナリズムについても知識がなく、予め期待する答えを学生Aに書かせるような質問をフィードバックにおいて投げかけることは皆無であった。偶然にすぎないが、このような状況が、学生Aに自発的にプロフェッショナリズムについて考察を深めさせる原因となった可能性があるのかもしれない。

筆者によるフィードバックに関しては、学生Aはインタビュー中に「先生が返事を書いてくれるのは、本当に嬉しいんです。僕だけに対する返事だとわかっているし。先生の返事を読むのがいつも楽しみで、返事をもらおうとまた書きたいと思いました」と答えている。

教員によるフィードバックが定期的に行われるという事実が、学生Aが楽しみながらDJWを続ける動機付けとなり、数多くのエントリーを書く中で結果としてプロフェッショナリズムについての記述が増えたという側面も否定できないであろう。

・継続性

DJWへの参加が学生Aのプロフェッショナリズムに関する気づきへとつながった理由のひとつに、活動の継続性(10ヶ月間)を挙げることができる。後藤ら(2009a)は、プロフェッショナリズムの育成を目的とした医学部1年次生に対する1年間の早期医療体験実習の効果を検証し、「1年間を通して行った本実習は、(中略)学生に行動変容を起こさせ、学習へのモチベーションをあげるなど、短期間あるいは一過性の実習では得られない効果を生む」と結論づけている。また、大生(2011)も、プロフェッショナリズム教育は、「時期を追って態度・姿勢・実際の行動のレベルへ継続的、実践的」なものでなくてはならないと述べる。学生Aもインタビュー中、DJWの継続性に関し、「DJWは、書きたいときにいつでも書けるから。忙しいときは書かなくてもいいし、でもいつでも書いていいと思ったら安心感がありました」と述べている。DJWは、授業活動として本質的に継続性をもっており、プロフェッショナリズム教育の教育方法として有効である可能性がある。

結 語

本稿では、医学部の2年次学生であった学生Aが医学英語の授業の課外活動としてのDJWに積極的に参加した結果、医療におけるプロフェッショナリズムに対する気づきを体験した過程を、学生Aのエントリーを分析することによって明らかにした。プロフェッショナリズム教育においては、講義、ワークショップ、

実習等さまざまな教育方法が試みられているが、例えば DJW を用いれば英語の授業においてもプロフェッショナルリズム教育へとつながる教育活動を行うことができる可能性があることが示唆された。

本稿のもっとも大きな限界は、対象の学生が1名であることである。学生 A が DJW を通して医療におけるプロフェッショナルリズムについての気づきを得ることができたとしても、それが DJW の影響か学生 A の特性かを結論づけたり、医学教育におけるプロフェッショナルリズム教育に対する DJW の効果を一般論として述べることは難しい。今後、より多くの医学生に DJW に参加してもらい、そのことによって彼らのプロフェッショナルリズムに対する意識が向上するかを研究する必要がある。

また、本取り組みにおいては DJW が課外活動であるという位置づけであったため、自主的に参加した学生数が少なく、結果として筆者はすべての学生に十分な長さや質をもったフィードバックを行うことができた。そのため、教員からのフィードバックに触発されて DJW を継続した学生も存在したかもしれないが、DJW を正規の授業内活動とした場合、1 学年 100 名を超える学生の DJW に十分なフィードバックを行うためには教員側のリソースをどうするかという問題が生じる。いたずらに教員数を増やすことなく、学生が満足感をもって継続することができる DJW とはどのようなものかを考える必要もあるだろう。

さらに、筆者のように医学を学んだ経験をもたない非医療関係者が、プロフェッショナルリズム教育を目的とする DJW の読み手になることの是非も検討されるべきであろう。非医療関係者の教員が、将来医師となる学生のプロフェッショナル教育に携わることは可能なのか、可能だとすれば何をどこまで教えることができるのかの考察が必要である。

しかし、医療におけるプロフェッショナルリズム教育の重要性を鑑みれば、英語の授業内でもその実現のために努力することには意味があり、DJW にはそれに貢献できる潜在性があると考えられる。

謝 辞

医学生としての多忙な時間を調整し、課外活動であった DJW に参加してくれた学生たちに感謝する。特に、多数のエントリーを書くことによって課外活動の成立に貢献してくれたうえ、夏休み中にインタビューに参加してくれた学生 A に心からの感謝の気持ちを述べる。

参考・引用文献

- 朝比奈真由美. 2013. 医学部におけるプロフェッショナリズム教育の現状. 日本内科学会雑誌, 102 (5), 1252-1258.
- 朝比奈真由美・河本慶子・宮田靖志・野村英樹・尾藤誠司・板井孝彦・浅井篤・天野隆弘・井上千鹿子・大生定義・後藤英司. 2012. 医師養成課程におけるプロフェッショナリズム教育の現状調査. 医学教育, 43 (6), 447-452.
- 大西弘高・錦織宏・藤沼康樹・本村和久. 2008. Significant Event Analysis: 医師のプロフェッショナリズム教育の一手法. 家庭医療, 14 (1), 4-12.
- 大生定義. 2011. プロフェッショナリズム総論. 京都府立医科大学雑誌, 120 (6), 395-402.
- 後藤道子・津田司・横山和仁・中井桂司・横谷昇治・竹村洋典. 2009a. 振り返りを伴った早期医療体験実習の教育効果について: 1年を通じたプロフェッショナリズム育成の場としての early exposure. 医学教育, 40 (1), 1-8.
- 後藤道子・津田司・横谷昇治・竹村洋典・佐川典正・新保秀人. 2009b. 三重大学における白衣授与式の意義とその評価. 医学教育, 40 (2), 123-127.
- Arnold DS, Atwood RK, Rogers UM. 1973. An investigation of the relationships among question level, response level, and lapse time. *School Science and Mathematics*, 73, 591-594.
- Morroy R. 1985. *Teacher strategies: Linguistic devices for sustaining interaction in dialogue journal writing*. Unpublished doctoral dissertation. Georgetown University, DC.
- Peyton JK. 1990. *Students and teachers writing together: Perspectives on journal writing*. TESOL, Alexandria, VA.
- Shrank WH, Reed VA, Jernstedt GC. 2004. Fostering professionalism in medical education: A call of improved assessment and meaningful incentives. *Journal of General Internal Medicine*, 19, 887-92.
- Shuy RW. 1987. Research currents: Dialogue as the heart of learning. *Language Arts*, 64 (8), 890-897.
- Stern DT, ed. 2006. *Measuring medical professionalism*. Oxford University Press, London. (日本語訳: 天野隆弘監修. 2011. 医療プロフェッショナリズムを測定する. 慶應義塾大学出版刊. 東京.)
- Yoshihara R. 2008. The bridge between students and teachers: The effect of dialogue journal writing. *The Language Teacher*, 32 (11), 3-7.

資料

学生 A による英語で書かれたオリジナルのエントリー

- Entry 1:** But I was also very embarrassed and regrettable on phlebotomy. I was so stupid that I failed it three times even though almost everyone did successful only once. I thought I can't do anything that everyone can easily do...I have little confidence now. I of course should not be negative only for this...but actually this shocking event seems to stay my mind for a while. But but I must face this problem and prove today's failure to be a good doctor. (March 31, 2015)
- Entry 2:** I had a good news yesterday. I got high score both in circulation and respiratory system tests!! I'm a little happy because they were very difficult and I think I failed the subjects, in particular circulation system. In fact, I failed immunology last year, so I wasn't confident to myself. Though I was very regrettable I decided I will never fail from next tests. And I made great success in nutrition & metabolism system ever I lived. I do not boast to you about how great I am, but I want to say that failure strengthen me. (January 17, 2015)
- Entry 3:** However, I think club activity is important at least in Japan...it is the opportunity that I can have connection with variable elders. It's difficult for me to have this chance so, I appreciate it and hope it will be very useful to me when I will have been doctor. (October 28, 2014)
- Entry 4:** Though I'm very very poor at communication, I think I can improve by only a lot of failures. I'm sorry to write such thing like "what foolish I am!". But, I thought I need analysis and should remain it by writing. And I couldn't forget today. (January 20, 2015)
- Entry 5:** I think law is very associated with medicine because doctors also must decide treatment and prescribe some medicine for many diseases based on law. Law is neither important nor unimportant, for if rules is too strong and tie sometimes doctors can't consider patient's happiness at first, while if it is very weak and free it might be a little dangerous because malignant doctors may plan treatments for not patients but money. It is very difficult problems but this is why we, medical students should learn law to solve the problems. (March 17, 2015)
- Entry 7:** Well...I'm not confident if I'll be able to make patients happy. (March 17, 2015)